

3/1~8は「女性の健康週間」

女性の健康課題を考える


 横浜市立大学大学院医学研究科
 生殖生育病態医学(産婦人科) 主任教授

宮城 悦子 先生


【聞き手】

 西尾 由佳理さん
 (フリーアナウンサー)

※本セミナーは、2023年2月3日に収録しました。

企画・制作 朝日新聞社メディアビジネス局

「子宮頸がん」「乳がん」が深刻 検診やワクチンで発症予防を

子宮頸がんの罹患リスク 検診とワクチンで減らす

西尾 日本における子宮頸がんの状況は、非常に深刻だそうですね。

宮城 上皮内がんを含めると年間3万4千人以上が子宮頸がん罹患しており、30代がかかるがん種の第2位です(※)。年間約3千人が死亡しており、それが増加傾向にあることは非常に気がかりです。先進国の中でいまだに子宮頸がんが増えているのは、実は日本くらいなのです。

西尾 どんな対策が有効ですか。

宮城 一つは「がん検診」です。国では20歳以上を対象に2年に1回の

子宮頸がん検診を推奨していますが、特に若い世代の受診率が低く、20代はわずか20%台。命を守るために、がん検診は必ず受けるようにしましょう。

西尾 がん検診に加えて、「ワクチン接種」も大切だそうですね。

宮城 その通りです。子宮頸がんの大半は、ヒトパピローマウイルス(HPV)の感染が原因です。HPV感染は性交渉によって起こり、7~8割の人が一度は感染するともいわれています。感染してもほとんどの場合は発症しませんが、感染者の1%未満が数年~数十年を経て浸潤がんへと移行します。ですから、性交渉をす

る前の段階で、HPVワクチンを接種することが望ましいのです。

西尾 HPVワクチンの副反応についても教えてください。

宮城 9年前、HPVワクチンの副反応の報道が相次ぎ、厚生労働省が積極的接種勧奨の差し控えを要請する事態になりました。その間、日本ではHPVワクチンの接種はほぼストップ。ただし、これは機能性身体症状であるとの見解が出ています。諸外国からも安全性・有効性に関する多くの報告があり、日本で勧奨差し控えが中止となったのは2022年度のこと。現在は、副反応が起こった際の診療・相談体制も、しっかり整えられ

ています。

西尾 2023年度からは、また大きな動きがあるそうですね。

宮城 子宮頸がんの9割以上を予防するとされる9価ワクチンの定期接種が受けられます。来年度は1997年度~06年度生まれの人は接種無料。日本から子宮頸がんが減っていく転換点になると期待しています。

40歳以上は乳がん検診もセルフチェックも習慣に

西尾 乳がんの罹患数も非常に多いですね。

宮城 年間9万7千人以上が罹患し、30代がかかるがん種の第1位です(※)。40歳以上の方は2年に1回、



問診とマンモグラフィの乳がん検診を受けましょう。

西尾 自分でできることとしては、どんなことがありますか。

宮城 例えば、月経後の入浴時などにしこりがいないか定期的にチェックするなど、乳房を意識する生活習慣を身に付けるといいでしょう。もし何か気になることがあれば、専門の医療機関などを受診しましょう。

(※)全国がん登録罹患データ(国立研究開発法人国立がん研究センター)

▶ 本セミナーの動画を公開中

日本医師会YouTubeチャンネル

https://youtu.be/10Ut4_qov0I



▶ 日本医師会の活動をご紹介します

教えて!日医君! 知って欲しい! 日本医師会

<https://www.youtube.com/watch?v=044Epc-WhvY>



▶ 本セミナーの動画は、朝日新聞デジタルでも公開中 ▶ <https://www.asahi.com/ads/202303nihonishikaionline/>